

9 授業「水平社宣言讃歌」第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業

(1) 【指導案】

〈1991年11月19日（火）〉

同 和 問 題 （ 道 徳 ） 学 習 指 導 案

3年B組 男子19名 女子18名 計37名

指導者 森 口 健 司

① 主 題 誇りうる生き方を求めて

② 主題設定の理由

4月の学級開きの日より、私は生徒一人ひとりがいつか差別解消の主体者として常に美しい生き方を創造し、自らの生き方あり方に誇りを持って人生を生き抜いてほしいと願い、同和問題学習に寄せる私自身の思いや願いを語りながら、人間としての生き方について問い続けてきた。

最終学年のスタート、昨年度より営まれてきた学年全体で同和問題学習に寄せる思いを語り合う授業を通して、生徒たちは本音の部分語り出した。第3回目の学年全体学習、「きず跡」の学習とき、A子が語る。「家族と一緒に同和問題について話し合うようになったんですけど、将来、私が地区の人と結婚したいと言ったらどうすると聞くと、父と母が言うんです。地区の人はききたない。家の誇りがよごれると言うんです。」続いてB子が語る。「私は今でもあそこへ遊びに行ったらあかんと言われる。あの子とつきあうなども言われる。」これらの発言は生徒たちにとっても教師集団にとっても、今まで漠然としか見えていなかった部落差別の厳しい現実を見せつけられることになった。私はこのとき、同和教育とは、まさしく生徒たちの生命を大切に守り抜き、一人ひとりの生命を輝かせていく闘いだと思った。

1学期、厳しい差別の現実を目覚めてきた生徒たちと共に、丸岡忠雄さんの講演記録「同和教育への希い」を中心に学習していった。その授業の中で、C子が語る。「私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。」それに応えるようにD子が語る。「今、3年生でも、何人かの人、自分が部落出身ということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、C子さんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思いたいです。私も部落に生まれたんだけど、このクラスの子だったら、信じていることができるからこのことが言える。」この授業は、生徒一人ひとりが信頼という固い絆で結ばれ、差別解消への主体者として生きていく思いをぶつけ合い、同和問題の学習に取り組む喜びをみんなできかんでいく学習となった。

お互いの本当の思いをぶつけ合い、同和問題の学習に取り組む喜びをつかみかけた生徒たちと、私は厳しい差別の中を生き抜き差別解消に向けて闘い続けた西口敏夫先生の詩「水平社宣言讃歌」を学習したいと思った。私が西口先生の詩「よろこび」を心の支えて生きてるように、生徒たちが讃歌に流れる思いや願いを受け止め、この詩が生徒たちのこれからの人生の生きる励ましや支えとなってくれればと願う。そして何よりこの詩を通して、差別解消に向けて生きた先人の思いや願いを胸に刻みつけてほしいと思う。

水平社宣言を読まれた西口先生の心の中にわきおこってきた思い。それが私たちの胸を打つ。そ

の私たちの胸を打つ力とは何か。讃歌に込められた西口先生の思いは、全国水平社創立大会の日、京都岡崎公会堂に集まった人々が宣言を聞いて満場嗚咽した思いや、その中で壇上に立ち「いま、わたしたちは泣いている時ではありません。おとなも子どもも、いつせいにたつて、この悲しみの原因を打ち破ろう。光り輝く新しい世の中にしよう。」と訴えた山田少年の思いとつながっている。水平社宣言の一つ一つの言葉に思いをはせながら讃歌をじっくり学び差別解消に向けて生きる生き方、人間として誇りうる生き方とは何であるかを生徒一人ひとりとらえさせたいと願った本主題を設定した。

③ ねらい

厳しい部落差別の中で、すべての人間の解放を高らかにうたい上げた人間としての誇りうる生き方に共感させ、自分自身を見つめ、周りを見つめるところから、積極的に差別解消に立ち上がる意欲と実践力を育てる。

④ 視点 集団と連帯

⑤ 指導計画

(1) 常時指導 生活ノートや1分間スピーチなどを通して、自分自身の生活をもとに人間としての真実の生き方とは何かについて考えさせている。

(2) 関連的指導 道徳「ナイン」（井上ひさし）
人間は多くの人と信頼の絆で結ばれており、その固い絆が生きる支えとなっていることを理解し、よりよく生きようとする態度を養う。

(3) 核心的指導 第一次 「水平社宣言」……………2時間
第二次 「水平社宣言讃歌」……………4時間(本時3/4)

(4) 発展としての関連指導 特活「わたしの進路」
同和問題学習の中からつかみ取ったものを土台として、人間としてよりすばらしい生き方を求めるとともに、自分の進路について考えさせる。

(5) 常時指導(発展) 何でも語り合い、支え合う仲間意識を高める。

⑥ 本時の指導

(1) 目標

人間として、生命の輝く生き方とはどんな生き方をいうか、生きることを意味を求め、自らを解放する力を育てる。

(2) 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1、「水平社宣言讃歌」を読んでわかったことや思ったことを話し合う。	○差別の現実を明らかにしていく中で、差別されても正しく生き抜いた先人のすばらしさに気づかせる。
2、「水平社宣言讃歌」が訴えていること、自分にとって讃歌が何であるかを語り合う。	○自分にとって水平社宣言の一節一節が何であるかを確認しながら、「水平社宣言讃歌」の奥に流れるものをじっくりと考えさせる。

(2) 【授業記録】第21回徳島県中学校同和教育研究会公開授業

1991年11月19日(火)

主 題 「誇りうる生き方を求めて」 (資料「水平社宣言讃歌」) 板野中学校3年B組
指導者 森口 健司

T 1 まだ少し時間があるんですけど、この前の全国大会(全日本中学校道徳教育研究会徳島大会特別公開授業)の日に書かれた生活ノートを紹介して、思いを新たに今日の50分の授業頑張りたいと思います。

1991年(平成3年)10月31日木曜日、今日のこの日は忘れることができないだろう。「こんな授業、二度とできないかもしれない」と思っていた板野郡同和教育研究会の授業さえ影が薄くなってしまいう程の授業だった。昨日このノートには「緊張もプレッシャーもない」と書いたけれど、さすがに体育館に入った時は少しビビって、それでも隣のY〇君としゃべったり、緊張のせいか顔がこわばっていたKH君をひやかしたりしていたら、いつもみたいな気分になってきて安心した。おまけに授業が始まった時にはやる気がすごい出てきて、何かわくわくしてきたくらいだった。そんな中で始まった授業、私は「今日こそ発言のスタートを切ってやる」と意気込んで挙手しようとしたら、ほとんどの子が挙手していて驚いた。いつもは発表なんてあまりしない子も挙げていて、「負けられない」という気持ちになった。でも、実のところなんか意見がありふれている感じで「こんなんで大丈夫かな」と思っていた。それがこんな授業になった。そのことが嬉しい。この授業に火をつけたのは、やっぱり同和問題学習のことを出したSNさんだと思う。3年生になってからは2週間に一度くらいのペースで公開授業があつて、嫌々受けた授業も何度かあつた。でも、今日は同和問題を学習したからこそ成り立ったんだと思う。やっぱり学習してきてよかった。これで私なりに道徳=同和問題学習ということが証明できた。10分ぐらいのオーバーで授業が終わった。もつともつと時間がほしかった。最後の礼が終わった時に周りから拍手が聞こえて、一回やんでいたのに退場の時また拍手してくれた。その拍手は私たちが体育館を出るまで続いた。とてもすっきりした清々しい気分になって、つつい顔がほころんでしまった。「ナイン」について言いたいことは全部言ったという感じだった。板野郡同和教育研究会の授業の終わったとき女子の何人かは涙を流していた。今日の授業には涙はなかった。みんなにここにしていた。Y Iさんが言っていたように本当に輝いていた。今日の私たちは準優勝どころか、優勝、ついでに全員にMVPでも贈りたい。それも互いの絆を確かめながらの優勝、要するに最高の試合ができたということで胸がいっぱいだ。この授業を3年B組のメンバーで受けられたことをとても嬉しく思うし誇りに思う。みんなに心からお礼が言いたい。徳島県中学校同和教育研究会は「3年B組の授業」を期待してたくさんの方がくるだろうけど、今日のような授業がしたい。そして、一生3年B組の絆を大切にしていきたい。先生もお疲れさまでした。そしてありがとうございました。

今日の授業、今まで取り組んだ2年間のいろいろな思いが集約した1時間になるように願

張りたいと思います。始めます。

Y I (女) 起立、礼、着席。

T。 今日も一筋の光を求めて、みんなと同和問題に寄せる思いを語り合いたいと思います。今まで取り組んできた同和問題の学習、その学習に寄せる思いを込めてみんなで読み合った水平社宣言讃歌について、(板書「水平社宣言讃歌と私」)水平社宣言讃歌が私にとって何であるか。今までの学習を通してかつての自分、今の自分を振り返りながら、思いを語り合いたいと思います。

SE (女) この資料を一番最初に読んだ時は、なんかやたら長くて読む気もあんまりならんかって、2回目ちよつと読んでみた時は、やっぱり半分くらいで何が言いたいのかわからんかって、3回目ぐらいからわかってきたような感じがして、それでもまだよくはわかっていません。私にとってこの水平社宣言讃歌という詩は、今までの資料の中で一番難しく、それでも一番身近に感じる資料です。

HM (男) 僕から見てこの水平社宣言讃歌は、僕がずっと前からいつも言っていることだけど、団結という言葉が好きで、その団結という言葉を変えてももっと好きになったような学習をした感じがします。団結は弱い者が強い者たちに勝つための一つの手段であるというのが好きです。団結の意味を学ぶことがなかったら、このクラスも今のような姿にはならなかったし、このような見事な同和問題学習とかには取り組めなかったと思います。

KK (女) さっきのHM君の意見によく似ているんだけど、私も団結という言葉が好きになって、郡同研の時にはすごく燃えたんだけど、途中いろいろあってそれで全道研の時に中山さんとかが支えてくれたのが嬉しかったです。

KH (男) 水平社宣言讃歌は僕にとって、今までやってきた全部の資料の総まとめで、今までの資料のすべてがこの中に入っているような感じがします。

KU (男) この水平社宣言讃歌は文としてはあまりまとまってない感じなんだけど、何かすごい力強いものを感じて、これが部落の人たちの本当の思いであるし、人間としてのあり方もすばらしいあり方を述べていると思います。

SN (女) 私もみんなと同じで今までいろいろな資料を学習してきたけど、「洗染一揆」にしても「意識の芽生え」にしても、今までみんなと勉強してきた資料は、結局この水平社宣言につながっていたんだということが水平社宣言讃歌を読んでわかりました。

MM (男) この水平社宣言讃歌を勉強して、その前に水平社宣言を学習して何となくだけどその水平社宣言を自分の生き方につないでいったんだけど、この水平社宣言讃歌を勉強したら、水平社宣言に書かれていることは、もつと生活の上にかかすことがたくさんあるんだということがわかってきたと思います。宣言の中に「われわれがエタであることを誇りうるときがきた」というのがあるけど、水平社宣言讃歌によって心から、自分が部落に生まれたということを誇りうるときがきたのだというように受け止められるようになりました。だからこの水平社宣言讃歌は僕が生きていくための支えとなり、また授業を頑張っていくためのエネルギー

ギーとなり、僕らにとって今まで学習してきた中で一番大切な資料になりました。

Y I (女) この資料は私にとってとてもいいものになったと思います。今まで私が一番好きだった資料は佐藤文彦先生が書いた「美しさを求めて生きる人生を」というのが一番好きだったんです。今までやった資料で部落の人が自分たちのことを書いた資料は、何かその人の気持ちになりにくくてわかりにくいことがあったけど、この水平社宣言讃歌というのは、部落に生まれたとか生まれなかったとか、そういうこと関係なくて人間としてあたりまえのこと訴えていると思うんです。今までの学習で自分も成長してきたからこんな思いになれるんだと思うけど、絶対部落差別はおかしい問題なんだから、自分が部落に生まれた生まれなかったというのは関係なくて、一人の人間として考えてみたら、本当におかしい問題だということをお知らせしてくれた資料であり、すごく自分に一番近いというか、わかりやすい資料だったと思います。

H I (男) さっきのMM君の発言につなげるような形になるけど、僕も水平社宣言や宣言讃歌を勉強してきて、自分の生き方の支えとなるものがいっぱいできてきたと思います。この資料を勉強していなかったら、やっぱりずっと部落に生まれたことを隠していこうという気持ちが先にきて、部落差別とたたかって生きるといような思いは沸き起こってこなかったと思います。今、なぜか嬉し涙というのか、何かそういうふうなのが流れてくるんだけど、やっぱりこの勉強してよかったと思います。

S N (女) H I君を始めクラスみんながいて、私が意見を言ったら、手を挙げて私の意見に付け足してくれたり、また誰かが言った意見に私が付け足したりして支え合っていて、そんな仲間ができたのはこの勉強をし始めてからで、水平社宣言讃歌という詩は私も一生大切にしていかなければならない一つだと思いました。

K H (男) 僕もS Nさんと同じで、やっぱり自分が発言したらみんなもそれに応えて発言してくれることがとても嬉しいです。そしてこの資料がなかったら差別の深い意味を一生わからずに過ごしていたかもしれません。

K T (女) 私はこの資料やこの学習から、自分一人ではないということがわかりました。怒りを言葉に変えることで、相手に苦しみや悲しみが伝わってよりよい人間としての結び付きが生まれ、私たちは深い絆で結ばれていくことがわかりました。

T S (男) 僕はこの学習に中から、このクラスはとてもすごいなあと思いました。3年生になったとき、始めの頃はあまり友だちもいなかったので不安だったけど、いろいろ解け込んでいて郡同研や全道研や、すごい授業ができてとても嬉しかったです。

Y I (女) ちょっと資料から離れるんだけど、私たちはずっと2年生の時から同和問題学習に取り組んできて、今までの授業の中ではすごく悲しくて涙を流すこともあったけど、今のみんなは悲しみではなくて差別に対する怒りで燃えていると思います。そして、前の郡同研の時はこんなにたくさんの先生方はいなかったけど、この県同研ではこんなにたくさんの先生方が私たちの授業を見に来てくれたということは、私たちにはすごいそれだけの力があるんだ

と思います。私たちには人を変える力があるから、絶対差別をなくすという自信も生まれてきました。やっぱり同和問題学習に取り組んできてよかったと思います。

MM (男) 今のHI君の涙のおかげで、みんなの支え合う関係がより強まり、またみんなが熱く燃え上がることができたと思います。郡同研の時はまだ悲しみの涙だったと思うけど、今は違うと思うんです。今のHI君もそうだったけど嬉しくてたぶん僕と同じような考えを持っているんだと思うし、人の涙というものはたぶん嬉しい時に流すからこそ、その一粒一粒の涙が一段とすばらしいものになるんだと思うし、悲しんでいるだけだったらこの問題は絶対に解決の方向には進まないと思います。このクラスは絶対自分の意見を本音でぶつけ合う授業ができていて、もし嘘で言っていることがあったとしてもそれを見抜く力がみんなにできています。でも最初の頃や1年生の時なんかは、うわべだけでほとんど自分の心とかをみんなにさらけ出すことがなかったけど、この一年半みんなとこの学習を続けてきて、みんなをよりよくわかって信頼する関係ができて、ナインでも習ったように絆とか団結とかの強さを知ることができたし、今まわりには仲間がいるからこそ、僕も頑張っていけるんだと思うし、たぶんみんなもそうだと思うから、まわりのみんなを信頼して頑張ってもらいたいです。

SN (女) 私も昔は本当に恥ずかしいんだけど、差別に無関心で小学校の時とか中学校1年生の時とか勉強していたことはしていたんだけど発表もあまりしなかったし、建前ばかりで差別はいけないとか、そういうふうなことばかり言っていたけど、2年生になって森口先生のクラスになって初めて差別の深いところまで知ったというか、そういう話し合いができるようになったんだけど、やっぱり始めの頃はしんないなあと思うて、私には関係ないって思いよったんだけど、2年生の全体学習の時に友だちが泣きながら自分が差別されてきたこととか、部落出身だということを打ち明けてくれた時から、やらなあかんと思いだして、友だちをそこまで苦しめる差別を許したらいかんというふうに思うて、真剣に取り組んできたんだけど、やっぱり私一人では差別はなくならないけど、このクラスのみんなとだったら差別をきつとなくせると思います。

YO (男) 郡同研の時にHI君とか、たくさんの子が涙を流したけど、今HI君が流した涙は喜びの涙に変わっていると思います。

HM (男) 僕もSNさんと同じで中二の時は発表をしていたかもしれないけれど、ただ紙に書いた文をただ読んでただけで、心の奥底にある思いを語ったりすることはなかったと思います。今はそのときそのときに思うことを友だちの発言を聞きながら、感じると思うことを素直にまとめて発表するようになってきました。昔は授業前に書いた文章を読んできたので授業の中で沸き起こってきた僕の本当の気持ちをみんなに伝えることができなかったと思います。この学習はただ文を読むのではなく、そのときそのときに揺れている思いを語り合っていかなければ本物にはならないと思います。それから今勉強しているのに下を向いていたりしている子がいたら、上を向いて発表してください。

YI (女) 私は中学校1年生のとき、やっぱり道徳の授業とかもあつたけど、必ず自分のクラス

に部落の子がいてあんまりめつたなと言うたら、やっぱりやばいとか思っていて、結局綺麗事で何にも差し障りのないような言い方しか言えなかって、それで2年生の時に全体学習とかでまず本音を語るということを学んで、家のこととか一番自分の醜い部分をさらけ出し始めてそれから何ですよ、真剣にこの問題に取り組み始めたのは……。それで3年生になって振り返って見たら、今はその部落の子とかそんなん関係なしに差別している社会とかに立ち向かっていけると思うんですよ。だからそう自分が変わったことが今はとても嬉しく思います。

K O (女) 私は2年生に入って公開授業を始めた時、どうしてこんなことするんだろう。こんなことするからみんなは部落のことを知ってしまい、部落差別がなくならないんだと思っていたけど、そのまま放っておいたら、やっぱり昔の人たちが孫たちに間違ったことを教えてしまうから、今の私たちが正しいことをしっかりと真剣に勉強しなければいけないと思うようになってきました。そして、そうすることによって何年か先には部落差別は必ずなくなっていくと思います。

K T (女) 誰でも自分の苦しい部分を語ってというということは苦しくつらいことだと思います。けどその苦しい部分を乗り越えて、本当の思いを語り合うことができるようになった時、私たちは本当の人間として生きることができるんだと思います。私も部落に生まれたけど、小学校5年生で自分が部落に生まれたということに気づいたんですけど、そのときは死んでしまいたいと思いました。今この同和問題の学習を積み上げてきて思うことは、歎くことばかりでなく怒りを持って、そしてその怒りを言葉に変えて訴え語っていくことによって、人間は本当に変われるということがわかりました。

S E (女) 全道研の終わったときに先生が、「先生が部落の人だからあんなに頑張れてあんな授業ができるというような囁きをした先生がいた」と先生の友だちから聞いたと言っていましたけど、私たちの中には部落に生まれなかった子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんながこの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかった子は部落問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくくやしかったです。

K K (女) 私もS Eさんと同じで先生から先生が部落出身の教師だからそんなに一生懸命なんじやと聞いたとき、すごく頭にきて生徒に本当の生き方を教えないかん先生が、どうしてそんな言葉が言えるのかなと思いました。

Y I (女) 私も先生からの話を聞いたとき、すごくくやしかったです。私たちはそんな部落に生まれたとか生まれなかったとか関係なしに、この差別自体がおかしいことだし、このことは人間としてなおしていかなあかんことなのだと思います。はっきり言って私はこの学習は、部落の人のためではなくて自分自身のためにこの問題の学習に取り組んでいるつもりです。

M M (男) その先生はたぶん、この学習の本当の重要性が受け止めることができているんだと

僕は思います。そして、人の生命に関わるという差別の厳しい現実を知っていたら、そんな情けない言葉は絶対出てこないと思います。この問題は部落に生まれたとか生まれなかったということ抜きで、すべての人が自分自身の問題として考え解消に向けて取り組んでいかなければ、絶対解決していかない問題だと思います。人間は大人になると人間としてすばらしくなっていかなければならないのに、自分の差別心は棚において人のことはとやかく言うけど、自分は差別の固まりという先生もいるんだなあと思うけど、僕たちはそんな大人や先生の差別心とかに気付いてしっかりと訴えていかなければ、部落差別を始めとする差別は、その人の心からは消えないと思います。そのことは僕も僕の中にも差別心があつてこの学習をしっかりと続けていかない限り、その差別心は年をますごとに段々と大きくなっていくし、根強く残っていくと思うんです。だから、僕自身この学習を大切に続けていきたいと思いません。それと部落差別を残してきた大きな原因として僕は、部落問題に無関心な人と、この学習を正しく学習してこなかったおじいさんやおばあさんなど、この教育を受けることがなかった人たちの二つに大きな原因があると思うんです。その中である意味で一番こわいのが無関心な人だと僕は思うんです。部落差別をなくすために生きる人生はものすごい喜びがあるけれど苦勞も多いと思います。無関心な人は真剣に考えることが少ないということだから、無関心な人のほとんどが、差別とたたかう側と差別する側に分けたら、差別する側に流されてしまうと思うんです。僕は部落差別に無関心な人を絶対につくつてはいけないと思うんです。すべての人が部落問題を自分自身の生き方に関わり、人の生命に関わる大変な問題なんだと自覚していかなければならないと思います。僕はこの学習は人間としての本当の生き方をつかんでいく学習だと思うんです。僕はこの学習から自分に自信がもてるようになって、人前でしゃべるのも緊張感がなくなって、いつも思いきり自分の思いをぶつけていくことができるようになってきたと思います。絶対に負けないというものをつかむことができたと思いません。

T。今のMM君の発言につなげてほしいです。

KH (男) 全道研の授業のとき、先生をあの人は部落の人だからといった人は、単に部落ということを知っているだけでこの部落ということが大変な差別の問題であるという自覚がないんだと僕も思いました。さり気ない言葉であってもその人を絶望させたり、大きく傷つけて死に追いやっていくことだつて起こってきたこの差別の問題をもっともつと真剣に自分自身の問題として考えられないのかなあと思いました。

SN (女) 私たちがあれだけ一生懸命頑張つて発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおつたと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと同和問題について学んでいなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というものもあるけど、将来同和問題学習に対する本当のことを知らないでずっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思います。

KK (女) 昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に「一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは、教育はできない」というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかったら同和教育はやっていけないんだと思いました。

Y I (女) この前の授業のときも言ったけど、同和問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に出会えてこういう授業をみんなで一緒にやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままで何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態にいるんじゃないかと思うんです。だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしなだけ。でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないと思うんです。先生から「ほんまに部落に生まれたと思うていてもその証拠がどこにも見つからなんだ」という話や、「自分が部落でないと思うていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかった」という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうも決定的な確証もなしに、人が勝手に「あの人が部落で、あの人が部落でない」と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。

T 4 水平社宣言讃歌についてみんなにいろいろな思いを求めたんですけど、やっぱり今までに取り組んできたものがあまりにも大きすぎて、宣言讃歌と今までに学習してきた思いとがやっぱり重なっていきますね。これは今までの学習の中でも話したんですけど、先生にとってこの宣言讃歌は宝物なんです。西口敏夫先生の「水平社宣言讃歌」という一冊の本、大事に大事にしています。その本の中にある「よろこび」という詩はこの十年近く心の支えとしている詩です。みんなと同和問題学習を積み上げてきた一つ区切りとして、大きく飛躍し、より大きな峠を越える一つとして、この宣言讃歌を勉強してきたわけですけど……。讃歌に触れてでもいいです。今まで取り組んできた中で、全体学習やクラスの同和問題学習、そういったものを思い起こす中で私にとってこの学習とは何だったんだろうか。かつての自分、今の自分、自分自身の奥に流れてきたもの、今流れているもの、そういうものを思い返しながらかつて同和問題学習に寄せる思いをあと残された時間、語り合いたいと思います。

M I (女) 2年生からこの問題に取り組んで公開授業とかいろいろやってきたけど、さつきMM君が言ったように私は下を向いたままで発表をしないときもあって、私を信じて必死に自分を語ってくれる人に応えず下を見ていることは、その人を絶望させ、その人を殺すことになると思ってしまうようになって、絶対私は信頼を裏切る人を殺すような人間にはなりたくない

と思いました。

TK (女) 私は家庭訪問のときに先生から初めて、自分が部落に生まれたと聞かされて思いきり泣いてしまいました。それでも郡同研のときは自分の本当の気持ちをみんなにぶつけることができました。でもそのときもなぜか悲しくて泣いてしまいました。今はもうそんな悲しみや苦しみとかはなくて、この授業でも涙なんか流さずに発表できるようになりました。そんな泣いていた私を変えてくれたのは、私の友だちの支えや励ましがあったのと、友だちを心から信頼できたからです。私はその友だちに感謝しています。

MS (女) 今までの私は部落に生まれたということは、隠さなければならないものとしか考えていなかったけど、郡同研のときに私が部落に生まれたと言ったときみんなが支えてくれて、みんなが一つになれたなあと思いました。私は同和問題を学習していくことは人と人とをつなげていくことだなあと思います。

TF (男) 今までこの学習をしてきて、最初の頃は手を挙げて発表するときに、自分で手を挙げようと思っても、10分ぐらい手を挙げるができなくてそのままみんなの意見を聞くだけだったんです。でもみんなの意見を聞いている中で、僕自身の中で変わっていくものがいっぱいあってやっと手が挙げられるようになったんです。それでも長い時間が流れていくうちに部落問題をやっぱり自分には関係ない問題という気持ちが出てきて、また手を挙げられんようになって、今も頑張らないあかんという気持ちと自分には関係ないという気持ちの両方があるんです。だから、いつもこの授業の度に自分を反省しながら頑張ってきているんです。そんなときにある子が資料についての考えをまとめる学習プリントをそんなん適当に書いとけと言ったことがあるんです。そのとき僕はものすごく腹が立ったんです。その子と同じような気持ちにならんと心の底から腹を立てることができたのは、僕の中にまだ弱い部分もあるけど心の底から部落問題をなくしていなあかんという気持ちが強いだと思って、この気持ちを大切に頑張っていかなあかんと思って今頑張っています。間違っていることを間違っていると言えることってほんまに大切やと思います。僕は間違っている友だちに「そんなこと言うな」と言えたことによって、自分というものに自信を持ちました。

HI (男) 今日もまた一つ大きな峠を越えれたと思います。やっぱりみんな頑張っているから、自分も胸張って頑張っていくことができるんだと思います。やっぱり「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で、やっぱり人間みんな一緒なんだと思います。部落に生まれた部落に生まれんかったということにこだわるのではなくて、一人の人間としてこれからもずっと下を向かずに胸張って



頑張っていきたいと思います。そして、やっぱり何かしらんどいつも涙が出てきてしまうんですけど、これからは涙を流さないようにずっとこの学習やこの出会いを大切に、ずっと将来も頑張っていって、この3年B組の絆というものをいつまでも持ち続け頑張っていきたいと思います。

S F (女) 私はこのクラスになってから、中一のときにいじめられた子に今も変な目で見られているということをよく話したんだけど、それってすごい私の誤解だったんです。この前のその子と自転車置き場であったんだけど、その子が話し掛けてきてくれてなんかその子がすごい変わったなあという感じがして、すごく嬉しくて何か私もその子のことすごい悪い目で見えていたけど、それってすごい私が誤解していたんだと思ったんです。ある意味で私はその子を避けて反対に仲間外れにしているような感じだったけど、その子が話し掛けてくれたときに、この子はこんなに変わっているのに、私の勘違いでこの子を逆に苦しめていたんじゃないかなって、すごく自分の狭い心が情けなくなって自分の思ってきたことを反省したんです。そして、ほんとは公開授業とかがすごくいやだった、公開授業のときも何も考えずにぼんやりしていることがあったんです。でも3年生になって森口先生のクラスになったときに、Y IさんやS NさんやM M君とかいろいろな人がすごい発表して授業中胸がいっぱいになってきて、心から私も頑張らないかんとするようになってきたんです。ほんとにY IさんやS Nさんやクラスみんながいてくれて私もこんな考えがもてたんだなあ、すごくみんなにお礼が言いたいです。

Y N (女) 2年生から取り組んできた全体学習を始めとする同和問題の学習は、私に勇気を与えてくれました。その中でいろんな友だちが自分をさらけ出して語ってくれているのに、私は下を向いたままずっと黙っていました。それが今では発表することはまだまだ難しいけど、語ってくれる友だちの言葉を自分なりに一生懸命に受け止めることができました。それが私にとって一番嬉しいです。

J K (女) 2年生から同和問題の学習をしてきた中で、私の心も大きく変わったと思います。自分が部落に生まれた人間として、自分自身の本当の気持ちをぶつけるような発言はできませんでした。でもこの前の全道研のとき、このクラスのみんなに自分が部落に生まれたことを打ち明けました。自分の心の奥にある本当の思いを語っていくことにより私は、人間としての本当の生き方をつかんでいくことができるんだと信じたからです。本当のことを訴えていくことはすごく勇気がいったけど、みんなが私を思いきり支えてくれました。あの授業の後、私は本当の友だちができたんだと思いました。自分の心を締め付けていた重苦しい部分を語ることができ、これからの人生を人間として堂々と生きていく喜びをくれたのは、先生や3年B組のみんなが支えてくれたからだと思います。

K T (女) 私はずっと前2年生のときは、自分には語ることはできないんだと信じていて、それを理由に発表することから逃げていました。それで繰り返し繰り返し発表できる子や語れる子がうらやましいとずっと思っていたんだけど、でもそんなことうらやましいと思うのがおかしいと思いだして、自分にもできないことはないんだと信じて発表したら、昔のことが嘘

のように発表することができるようになり、今はこうやってこんな大勢の人の中でも手を挙げて発表できるようになりました。まだ手を挙げることができている人も、絶対できないことはないので一生懸命手を挙げて発表してみてください。

T 5 はい、頑張りましょう。

KK (女) 部落に生まれたというとても苦しいことをみんなに語っていき、自分自身が人間として胸を張り堂々と生きていくことができるかどうかは、周りのみんなの取り組んでいく姿勢や雰囲気が決まってくると思うんです。いくらその人に勇気があったって、周りがしらけていたりみんなできに頑張ろうとする思いがなかったら、絶対に立ち上げられるものではないし、語ることもできないと思うんです。一人一人の仲間を支える周りの雰囲気がとても大切だと思います。みんなで一人一人を大切にしていって、よりよい雰囲気を作っていくことができるように頑張っていきたいです。

MO (女) 私はこの前、クラスの中で部落問題について話し合っていたときに、「自分の中にはおじいさんとかおばあさんとかが差別してきて部落の人を苦しめてきたという、人を差別してきたという血が混ざっているのがいやじゃ……」と言ったときに、YIさんとかが「この勉強を徹底的にしていったら、そんなこと言うのがばからしくなってくるMOさんはMOさん自身でしかなくて……」と言ってくれたのがとても嬉しかったです。今までこの学習をしてきて私は差別していないと思っていたんだけど、この資料を読んで自分の中にもものすごく差別していたところがあるのに気付いて、自分の中にこんなに差別心があるのに、何かずっと無関心だったことが恥ずかしかったです。

MM (男) 涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当の喜びをつかんでいくことができるし、より人間として素晴らしい生き方を求めて頑張ることができるから、もつともつと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習をとらえて、一生懸命にこの学習に取り組むことができたら、もつともつと自分自身成長していただろうし、もつと早く変わったと思うんです。小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ていると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしか授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあったんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思えてくるんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももつとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかったと思うし、今僕たちが

続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもっともっと小さいものになっていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ同和問題の授業をやっても、やったというだけで生徒の中には部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしかとらえられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。僕たちが中学2年からやって



きた本音の同和問題学習をこれから先も大切にして、絶対部落差別をなくしていかねければならないし、大きくなっても絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思います。

R S (女) 同和問題を学んできて私は変わったと思います。1年生のときにお母さんとかお父さんの前で同和問題の話をしたとき、お父さんもお母さんもとてもつらそうな顔をしたから、もうこのことは絶対口にしないと決めていたけど、この頃だったらお母さんとかお父さんの方から同和問題のことを話し掛けてきてくれるようになりました。私は同和問題の学習は人間の本当の生き方をつかんでいく学習だと思います。

K U (男) この学習をするまでは、クラスの友だちでも言葉の上の仲間という感じで、よく知らない友だちもいたんだけど、この学習をしてきて一人一人が自分の存在を自覚してみんなが助け合う雰囲気が出てきているから、本当の仲間というのが何であるかがわかってきて3年B組のみんながすごい固い絆で結ばれたと思います。

S E (女) この学習をしてきて私のはつきりと思ったことは、人を変えていくのは周りであって、自分が変わるのも周りの影響があって変わっていくんだと思いました。この学習のおかげで私たちは何かすごい絆というか、切っても切れない結び付きができたと思うし、このメンバーだったら高校へ行っても離ればなれになっても、挫けそうになったらまた会って自分のことを言い合えて支え合っていけるという自信があります。

M T (男) 2年生の最初に先生と出会って、そのときに最初先生が「わしの目を見い」と言うて「目を見て話をするもんじゃ」と言うて、先生の目を見ていてこの先生はどこか違うなあと思いました。それでいろんな資料を勉強していく中で最初の方は、何か自分の書いていることでも発表しようと考えて、震えながらも手を挙げて発表していたんだけど、繰り返し授業があった中で発表しないで授業を終わったら楽だつて、その後の授業も発表せんと黙つて下を向いて授業を受けたら楽だつて、でもこのままずっとおるんではあかんなあと思うて、何回か手を挙げて言おうと思ったんやけど、なかなか手が挙がらないでいたんだけど、差別

は絶対許したらあかんし、周りの雰囲気の流れで部落の悪口を言う人間に絶対ならないためにも、楽な道を選ばずに僕自身を鍛えるためにも発表していかなあかんと思うし、その頑張りが大きくなっても周りの雰囲気に流されないような人間になっていくことにつながると思います。

K M (女) 私はこの学習に取り組んでなかったら、差別心があつてずっと差別していたと思います。それでこの教育に取り組んできて少しずつだけど差別心がなくなってきたと思うから、この学習に取り組んできてよかったと思います。これからもこの学習に取り組んでいきたいと思います。

S N (女) 道徳教育の全国大会のときに、私の友だちが一人手を挙げられなかったと言って、すごい気にしとったんだけど、それでみんなのこと裏切ったことになるのか言うて、すごい気にしとったんだけど、それで「今度頑張ったらええで」と言うたら「今度頑張る」と言うふうに言よつて、それで今発表してくれてすごく嬉しいです。

K T (女) 下を向いているのはやめてください。何も逃げることもないし、何もおそれることもないと思います。緊張はみんな一緒だと思います。今日自分は手をあげられなかったと過去形にしないで、この場で今という瞬間を大切にしてお話してほしいと思います。

K N (男) 僕は2年生のときは、同和問題とかはどうでもいいと思っていました。全体授業のときでも先生に当てられて「ああ、いややなあ」と思いながら、学習プリントを見ながらでしか発表できなかったけど、今はこの3年B組になってから下手でも自分で下を向かずに発表できることができたのが嬉しかったです。

K K (女) 50分という時間はすごく短いような気がします。私はもうだいたい80%ぐらい、私の心は変わっているけど、まだ変わっていないところもあると思うのでB組のみんなと一緒に変えていきたいと思います。それで私のお母さんとか家族の心も変えていきたいと思います。

Y I (女) もう時間がきてしまつて言いたいのに言えなかった人もいると思うんですよ。けどこの3年B組だったことを誇りにして、これからもずっと頑張つてほしいと思います。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かっていかなければいけないと思います。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に向かつていきたいです。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんです。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張つた姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずにずっと差別解消の日まで頑張つてほしいと思います。

T。終わります。

Y I (女) 起立、礼、着席。

(3) 【資料】

「水平社宣言」讀歌

西口 敏夫

「全国に散在する吾が特殊部落民よ、団結せよ！」

何と言うすばらしい呼びかけであることよ！
何と誇らしい提言であることよ！
そして、又、何と、つよく肺腑に應える言葉であることよ！
何と勇気を鼓舞させるつよい叫びであることよ！

とまれ、

「特殊部落」

この言葉の、何とはらだたい言葉であることよ、

われわれは、決して特殊ではないぞ！

われわれは、この特殊部落と言う言葉の差別性に、

はげしい怒りをおぼえる。

われわれに対する差別は、

厳然として存在している事実なのだ。

しかるが故に、宣言は、

自ら、「全国の特特殊部落民よ！」とよびかけた。

兄弟よ、

自ら「特殊部落民」と呼びかけた事は、

自ら「特殊部落民」と言う差別語を肯定するものではないぞ。

「特殊部落民」として差別をうくるが故にこそ、

「全国の特特殊部落民よ団結せよ！」と、よびかけたのだ。

「特殊部落」

この言葉の、何と差別に満ちた言葉であることよ、

「特殊部落」

この言葉は、行政がつくり出した差別語そのものなのだ、

われわれの部落は、

差別の被害をうける被差別部落、

われわれの部落は、

解放をひたすらねがう封鎖されし部落、

われわれの部落は、

未だ解放されざる未解放部落、

このわれわれの部落をして、特殊部落と言う、

見よ！決然と呼びかけたこの悲壯を！

聞け！昂然と呼びかけたこの提言を！

このかづよい呼びかけに、

このすばらしい呼びかけに、

われら未解放部落の同人たちは、

耳をそばだたせ、まなこをひらき、

口をひきしめ、こぶしを握り、

惰眠をけちらし、起ちあがり、

「おーっ！団結だ！」と喊声をあげて呼応した。

「全国の特特殊部落民よ団結せよ！」

あゝ、何と言う感動的な呼びかけであることよ！

「長い間、虐められて来た兄弟よ、」

まこと、

長い間の、むごい、手びどい、

差別と迫害の連続であったことよ、

そして、

これは今もなお、

われわれに、おしかぶさっている冷厳なる事実なのだ。

この差別の迫害によって、

多くの兄弟たちは、

或いは屈辱に涙をしぼり、

或いは貧窮にうちひしがれ、

人間外の人間として、冷酷、残忍な処遇に泣かされた。

出水に慄く河原の部落の友、

崖ぐずれにおびえる山すその部落の人、

せまい地域に圧縮され、傾く家の中で、呻吟する都市の部落の同胞、

かてて、くわえて、
主要生産の座からは疎外され、
まともなしごとから締め出され、
苦しいくらしに追いやられ、
無情な飢饉を強いられた。

われわれの歴史は、残虐の連続であり、
憤恨の記録であった。

まこと、
「長い間、虐められて来た兄弟であった。」

「過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた吾等の為めの運動が、何らの有難い効果をもたらさなかった事実は夫等のすべてが、吾々によって、又他の人々によって毎に人間を冒瀆されていた罰であったのだ。」

過去半世紀間になされたと言うわれらのための運動は、
差別から解放せねばならぬとの行動は、
果して、何がなされたと言うのか！

明治四年の太政官布告、
「エタ、非人の称を廃すべき候こと」
この布告で、どんなききめがあったと言うのか、
一片の空々しい文章だけで終ったではないか。
この一片の空文は、人間冒瀆以外、何ももなかったではないか。
明治四年にこの解放令？この布告を出しながら、
明治五年、壬申戸籍と言う差別戸籍をつくったではないか。

過去半世紀間に種々の方法と、
多くの人々によってなされた吾等の為め？の運動が、
何等の有難い効果をもたらさなかったことは、明白なる事実だ。

ききめがなかったと言うことは、
われわれ自身の、解放への行動も、
自らの主体的自覚の上に立った行動でなく、
他の人々の行動も、

これ又、解放の認識の上に立った行動ではなかった。
それゆえに、
これらの運動は何らのききめを、もたらさなかったのだ。
それは、われわれ部落大衆にとつても、
又、他の人々にとつても、
人間を冒瀆され、
人間を冒瀆して来た、
罰でもあり、
罪でもあったのだ。

「そして、これらの人間を動かすかの如き運動は、かえって多くの兄弟を墮落させたことを想へば」

これらの人間を動かすかの如き運動、
そうだ、まさに、人間を動かすかのごとき行為であった。
実に、それは欺瞞的融和政策であり、
悪辣な頭で対策であり、
糊塗的な、一時治療的手段であり、
偽善的な、慈善的、手くだであった。
そして、このことは、
すこぶる多くの兄弟たちも墮落させてしまった。

宣言は、このことを鋭く見ぬき、
するどく追った。

さらに差別者どもは、
「ねた子を起すな。」との、
アヘン的、文句をねつ造し、
これを巧みに利用し、
すこぶる多くの兄弟たちをして、
解放の方向を見うしなわせ、
解放への行動を停滞させてしまった。

「ねた子を起すな。」
それは、われらの思想を麻痺させるはげしい毒薬であり、
われらの方向を誤らせる悪魔の囁きであり、
われらの行動をにぶらせる邪悪の声である。

更に、さらに、
差別にかかわる一切の責任を、
われらの責任であるときめつけ、
言葉をよくせ、
行ないをつつしめ、
まじめに働け、
粗暴な集団活動をするな、と、
われらにのみ、その改善を迫ったでないか。
そして、おのれ自身は、
更に、さらに、
融和的体質をつちかい、
差別的思想をつよめてきたではないか。
兄弟よ、
われわれは、これらの、人間を動かすかのごとき、
欺瞞を見やぶらねばならぬ。

⑤ しつ黒の差別の帳ひきちぎれ引き裂け千千に形果つるまで

⑥ しいたげに怒り燃すべし蔑みに憤るべし差別うくる子よ

「この際、吾等の中より、人間を尊敬することによって、自ら解放せんとする集団運動を起せるは寧ろ必然である。」

そうだ、
.....
人間は動くものにあらず。
.....
人間は尊重するべきものなり。

人間を尊敬することは、
人類の永遠の哲理。
基本的人権の尊重は、
人類普遍の原理。

この人類普遍の原理にそって、
人間の尊厳を実現するために、

差別と屈辱からの解放をたたかいたるために、
自らの主体によって、
自らのちからによって、
われわれは敢然と奮起したものである。

太陽は、夜が明けたので、昇ってくるのではないぞ、
れい明にみちびかれて、太陽は現われるのではないぞ。
太陽が昇るから夜が明けるのだ、
太陽が近づくかられい明があるのだ。

解放のれい明も、まさにこれに似たり。
解放のれい明は、われわれの主体的な行動によってのみ来るのだ。
即ち
解放をかちとることは、
自ら解放せんとするものの集団運動によってのみ、
結実するものである。
しかるが故に、
われらの中より、自らの集団運動を起こすこと、
これは必然であり、
また当然である。

そして、われわれの解放運動は、
われわれ部落大衆のみの尊敬を希っているものではない。
われわれの運動は、決してセクト的ではない。
「人間を尊敬することによって、」と、
すべての人間の尊敬をねがい、
すべての人の、人権の尊重を提唱しているのである。

そして、この運動を起こすことは、
天の、われわれに下した使命であり、
われわれの、天賦の課題でもあるのだ。
そして、これこそ、
⑦ 眞実に対する運命であり、
崇高な理性の当然であり、
人間生存の敢然たる倫理である。

まこと、

「われわれの集団運動を起こすのは寧ろ必然である。」

そうだ！そうだ！そうだ！

「兄弟よ」

何と言う心温まる骨肉の呼びかけであることよ！

そして何と言う血盟を誓う、同人的な呼びかけであることよ！

血は水よりも濃いとか、

差別と屈辱にひしがれた、同じ運命に泣く同人たちよ、

われわれは、生と死を同じくする、

まこと、兄弟なのである。

兄弟よ、

この呼びかけこそ、

ながい限りをさまざんとする、

やさしい母のことばであり、

憎恨と安逸をゆるさぬ、

きびしい父の叱責でもある。

「吾等の祖先は自由、平等の湯仰者であり、実行者であった。」

そうだ、

われわれの祖先は、

つねに自由と平等をかちとるために、

たたかいつづけて来た。

そして、

つねに自由を礼讃し、自由を願い、自由を求めてきた。

人間は、生まれながらにして自由であり、

個人の尊厳と権利は、平等である。

この大原則を、われわれはつねに体し、

この大原則を、われわれは一時も忘れなかった。

これこそは、われわれのかざす燃たる旗幟であり、

これこそは、人類普遍の原理、生存の基調であった。

そして、われわれの祖先は、

自由、平等の実現へのための実行者であった。

あゝ、かくの如き価値高いこの営みの実行者であるために、

かえって、はげしい迫害に見舞われた。

正しい行動を推進する至純なる人間が、

かえって迫害を受くるとは、

あゝ、何たる矛盾、

何たる不合理。

「ろう劣なる階級政策の犠牲者であり、男らしき、産業的殉教者であったのだ！」

おのれの支配体制の保持のため、

ろう劣なる階級制度をつくり出し、

われわれを、人間外の人間として、

最も下層のわくにおとし入れ、

巧みに国民の分裂をしくみ、

あらゆるはずかしめと、迫害をもって、

われわれに、のしかかって来たではないか。

まこと、われわれは、分裂政策の犠牲者であり、

身分階層の被害者であり、

痛恨きわまりない受難者の群である。

そして、

主要産業の座から追いやられ、

貧困のくるしみに打ちのめされ、

まともな労働から締め出され、

人のいやがるしごとにつかされた。

産業的殉教者われわれは、

腹だたいかな、

むりやりに貧窮の苦汁をすすらされた。

「かまどには、火気ふき立てず、
こしきには、くもの巣、懸きて、
飯かしぐ、事もわずれて、
ぬえどりの、のどよい居るに」と、
うたいし万葉の、貧窮問答、さながらに、
われわれの兄弟は、
犠牲と貧困に打ちのめされた。

あゝ、天よ、
大地に伏して嘆息し、
虚空に向って慟哭す、
われらの怨嗟の声をきけ！

兄弟よ、
われわれの祖先は、自由・平等の渴望者であった。
このことを双手をあげて誇れ！
われわれの祖先は、階級政策の犠牲者であった。
このことを、飲拳を握って怒れ！
われわれの父母は、産業的殉教者であった。
このことを、齒を切していきどおれ！

「ケモノの皮剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎとられ、
ケモノの心臓を裂く代価として暖かい人間の心臓を引裂かれ、そ
こへ、下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた。」

あゝ、何たる残忍、
何たる無惨、
かくのごとき、酷いことが、許されてよいものか。
おのれの戦道具の必需の皮の生産を、われわれに押しつけた。
兄弟たちは、人の忌避する生産過程をたえしのび、
ケモノの皮剥ぐしごとをも、
ケモノの心臓ひき裂くしぐさをも、
黙々として、なりわいとした。

「籠籠に乗る人、かつぐ人、その又、草履をつくる人」と、
草履つくりのわれわれは、最下層の身分として、おしこめられた。
煙管の火を乞うに、捨て火をされ、

おろおろと、捨てられた部落の老人。
下駄をはくことを禁じられたハダシの子は、
灼熱の大地に、足を焼き、
布地の帯しめることを禁じられた、おびなし子は、
藁なわの帯をさせられた。
ハダシの子は、部落の子と、さげすまれ、
帯なし子は、差別の子と、見下げられ、
美しさを求めることすら禁じられた部落の子らは、
「だらしなし。」と、嘲られた。

あゝ、
皮を剥がれた報酬として、
「エタ」なる侮辱の烙印をやきつけられ、
心臓を裂かれた代価として、
「四つ」なる獣視のまなこを投げつけられ、
更に残酷なり、その上に、
嘲笑の唾まで吐きかけられた。

むごい！
むごい！
むごい！
こんなむごいことがあるものか。
これこそ、まさに、
この世の地獄、生き地獄！

むごい！
むごい！
むごい！

「呪われの夜の悪夢のうちにも、なお誇り得る人間の血は涸れず
にあった。」

あゝ、呪われの夜、
痛恨の夜、
悲痛の夜、
被差別の苦しい永い夜、

愉しみも、絶たれた味けなき日ぐらし、
望みも見あたらぬ日かげの毎日。

されど、されど、
われらには、尚、誇り得る人間の血は涸れずにあつた。
あゝ、何と言う感動ぞ、
何と言う決定的な叫びぞ。

俺の胸はつまつた、
とめどなく感動の涙はながれる！
血管はぼう張した。
どくつ、どくつと、血潮は波うっている！
そうだ、
俺の血は涸れてはいない！
俺の血は涸れてはいない！

再び唱えたい、
「尚、誇り得る人間の血は涸れずにあつた。」と。

人間外の人間として、
この世に又となき程のむざんさに、
打ちめされたわれわれにも、
見よ、人間として誇り得る尊い血潮が、
清純な鮮血が、五体をかけ巡り、
真っ赤な血潮が、全身に、たぎっているではないか。

われわれも人間なんだ！
まぎれもない尊い人間なんだ！

そうだ、
人間の血は涸れずにあつたのだ！

どつ、どつ、どつ、
生命の鼓動がきこえる。
びくつ、びくつ、びくつ、
血脈の液は奔流している。
ずきつ、ずきつ、ずきつ、

心臓は、生命の歓喜を叫んでいる。

血潮は脈うつ、
この血は侮辱を怒った血、
この血は屈辱にたぎった血、
そして、ながいながい迫害にも、
涸れずにあつた誇り得る血。

俺に血潮のたかまりは、
感きわまって、最高潮に達した。
俺のこぼしは、しらずしらずの間に、
かたくかたく握りしめられているではないか。

「尚、誇り得る人間の血は涸れずにあつた。」

「そうだ！そうして吾々は、この血を享けて人間が神にかわろうとする時代にあつたのだ」

そうだ、
われわれは、この血を享けて、
人間が神に代る時代におうたのだ。

人間が神に代る！
人間が神に代る！
あゝ今、この願いが、ここに結集し、
人間の誇りをたたえ、
人間の尊厳を訴え、
人間は何よりも尊いことを宣べている。

人間が神にかわろうとする時代に遭遇した。
いや、とまれ！
神にかわろうとする時代におうたとは、
単に出合ったと言うことではない。
われわれは、人間が神に代ろうとする時代を創造するとのことだ。
呪われの被差別の中にも、
尚、涸れずにあつた祖先の血を享けて、

われわれは、崇高な人間尊重の時代を創り出す時におうたのだ。

「犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者がその荆冠を祝福される時が来たのだ。」

われわれには実にながい犠牲の歴史だった。

特殊部落民と言われ、こよなき冒瀆をうけた。

人間冒瀆の許すべからざる罪悪を、

今、断呼として抗議すべき時が来た。

人権無視の烙印を、

人間冒瀆の烙印を、

貧窮と逆境の烙印を、

断呼として投げ返す時が来た。

投げ返す！

これは不正に対する抗議であり、

差別に対する糾弾である。

同志たちよ、

抗議こそ、正しさを求めるわれわれの正義のいとなみと知れ、

糾弾こそ、被差別者たるわれわれの権利の実行と知れ、

差別に対しては、断呼、糾弾せねばならぬ、

不合理、矛盾に対しては、断呼、斗争せねばならぬ、

糾弾を不当と言ひ張る者は、

差別をなおも温存しようとする悪らつな謀者なり。

犠牲者よ、

断呼としてその烙印を投げ返せ、

糾弾こそ正しきものと確信せよ、

糾弾こそ人間の崇高なる権利と確信せよ。

そして、権力に抗した、彼の殉教者が、

いばらの冠をのせられ、処刑された故事を想起せよ、

そして今日、

いまその荆冠が祝福されている事実を直視せよ、

受難は荆冠として祝福された、

これこそ、解放を願う象徴。

いばらの冠は、解放へのシンボルとして、描かれた、

荆冠はわれらに道を照らしている、

解放の旗、荆冠旗はかくして生まれたり、

兄弟よ、

烙印を投げ返す糾弾は、

解放への行動であり、

受難をしるす荆冠は、

解放への願望である。

されど、

このことは、われわれの主体的な行動によつてのみ、

かちとれるものである。

その時が来た！

その時期は到来した！

「われわれは、エタであることを誇り得る時が来たのだ！」

あゝ、何たる感動ぞ！

あゝ、何たる叫びぞ！

とまれ！

われわれは、エタと言われ、

「四つ」と侮られている事を、誇れ！と言うのではないぞ、

差別を受けていることを誇れ、よろこべと言うのではないぞ、

エタであることを誇れとは、

われわれには、差別の屈辱を、うけたためしがあるが、

われわれは、人を差別した、ためしがない。

われわれには、人間外の人間として虐められたことがあつても、

他の人を、人間外の人間として、処遇した事実はない。

人間を尊敬することを、命のようにだいにしてきたことが

あつても、

人間を、エタだ、四つだと、差別してきたことがない。

このこと故に、

われわれこそ、人間を尊重せよ！と、

叫ぶ権利がある、と、言うことだ。

「われわれは、エタであることを誇り得る」とはこのことなのだ。

尚、更に、

われわれには、差別と闘う、解放をかちとる、と言う。

崇高な行動を推進する使命がある。

差別を、うくるが故にこそ、

差別とたたかう権利があり、

エタと言われる、ためにこそ、

人間の尊厳を訴える権利がある。

「われわれが、エタであることを誇り得る」とは、

この権利を誇り得る、ことなのだ。

あゝ、何と言う誇らしいことぞ！

そして、この価値あるたたかいを、すすめる時、

そのときは今だ！

今、きたのだ！

何たるよろこびぞ！

まさに、

「われわれは、エタであることを、誇り得る時が来たのだ！」

— 少 意 —

「吾吾はかならず卑屈なる言葉と怯懦なる行為によって、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。」

兄弟よ、

われわれは、われわれに対するこの戒めを、

厳肅に傾聴しなくてはならぬ。

われわれは、自らの力で、解放をかちとることを願うが故に、

ゆめ、卑屈の群れであつてはならぬ。

われわれは差別の屈辱からの解放を願うが故に、

ゆめ、怯懦の徒輩であつてはならぬ。

卑屈と怯懦、

これこそは、われわれ自身、

又、他の人々と、すべてのものの、

人間冒瀆につらなり、

人権否定にかかわるものである。

ゆえにこそ、われわれの祖先は、

つねに卑屈をいましめ、

怯懦をきらってきた。

われわれは、自らの力で解放をかちとる営みをつづけたために、

必して、必して、

卑屈と、怯懦であつてはならぬ。

憚を正して、この祖先の戒めを、拝聴せねばならぬ。

「そして、人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を動かすことが何んであるかを、よく知っている吾々は、心から人生の熱と光を、願求礼讃するものである。」

人の世は、連帯によって結ばれ、

あたたかい人間同志の連帯社会でなくてはならぬ。

しかるに、人の世は冷酷無情、

「人の世の冷たさが、何んなに冷たいか」

われわれは、このことの例を、

いくた、幾多、知っている。

すべての人は、ともども幸せである、

そう言う世の中でありたい。

これは人間のねがいのまこと、

人間のあゆみの、真実。

しかるに、人の世は、

人を動かすことを知らない世の中、

人を尊敬することを知らない世の中。

われわれは、かゝる冷酷な世の中を、

あかるい光に充ちた世の中に、

われわれはかゝる冷たい世の中を、

あたたかい人間の情熱の交う世の中に、
われわれは、創り出さねばならぬ。

われわれは、差別のない、
貧しさのない、
いためつけのない、
はずかしめのない、
専制と隷従のない、
こんな世の中を創り出さねばならぬ。

かゝる解放された、人の世を創り出すために、
われわれは、ここに団結を誓いあい、
更に加わらんとする迫責をも覚悟して、
決然たつて奮起した。

あゝ、われわれは、
心から、人生の熱と光を、願求礼讃するものである。
人生の熱と光とをねがい、
人生の熱と光をたゞえる！

あゝ、何と言う崇高なる思想であることよ！

「水平社はかくして生まれた、
人の世に熱あれ、人間に光あれ。」

水平社は生まれた！

差別の現存することは、
人類普遍の原理に悖る。

水平社は、生まれるべくして、生まれたのだ。

生まれるべきは、社会の進歩の必然であり、
生まれるべきは、幸福追求の当然である。

水平社は、かくして、生まれるべくして生まれ、
不当な差別の事実に対し、

それを排除する正義の闘いを展開するものとして、生まれた。

闘いだ！

闘いだ！

差別の排除、
それを成し遂げるのには、
闘いあるのみである。

われわれは差別の不当を糾弾する。

それは、聖なるいとなみ、
それは、正しいしぐさ。

しかるにこの行為を、

あらゆる方法にて妨害し、
さまざまな手段にて弾圧し、
不当行為と、きめつけた。

誰だ、それは！

これこそは、まさに、にくむべき差別、
まこと、にくむべき差別の元兇。

されど、されど、

われわれは、闘い、たたかい、たたかいつづける。
迫害、圧迫、弾圧、
それをはねのけ、はねのけ、掃除けつづける。

見よ、

このたたかひの姿、
これこそは、まこと、人間の美しい姿、
人間のけだかい姿。

世の中の、すべての人よ

この姿を賞讃せよ！
この人々を讃美せよ！

水平社はかくして生まれた。

それは、たたかいへの出陣の咆哮。

宣言は、水平社結成の深い意義を述べて来た。

宣言は、水平社同人に、貴い教訓を語って来た。

水平社同人の結集は、

輝かしいたかひの歴史をつみあげ、

差別と屈辱の怒りを累積し、

自らの手によって誕生したのだ。

しいたげられた同人は、

今、しつ黒の差別のとばりをひき裂こうと、

隷従と圧制のきづなを断ちきろうと、

決然と奮起したのだ。

人の世に熱あれ、人間に光あれ！

あゝ、何と感動に充ちた叫びであることぞ！

かくもすばらしい宣言は、いづこにかある。

フランスの自由・友愛の人権宣言にもまさる、

ソビエトの労働の革命宣言にもまさる、

他の、世界のいかなる人権宣言にもまさる、

かくも格調たかい人権宣言が、

今、こゝ、京都阿部公会堂にて誕生したり。

あゝ、何たる感動！

満堂は、今、ゆれている。

しいたげられた全国の同志は、

しつかと固くだき合った。

それは、結成をよろこぶ安易な抱ようにあらず、

それは、解放を誓いあい、斗いを誓い合う強い抱よう。

いためられた全国の同人は、

とめどなく涙を流した。

それは屈辱を省みる悲歎の涙にあらず、

それは斗いの厳しさにうちかつ決意の涙。

うおーっ！堂に喊声が満つ。

それは虚声の叫びにあらず、

友は友をよび、

魂は、たましいをよぶ。

旗は、ちぎれよとばかりうち振られ、

こぶしは、にぎられ、空を突いた。

全国の特殊部落民よ団結せよ！

あゝ、世界にさんたる大宣言は生まれた！

人間解放の大宣言は誕生した！

これは部落大衆の血潮の中から生まれた宣言！

これは部落大衆の生命の泉から湧き出た宣言！

この大宣言はわれわれの血潮そのもの！

この大宣言はわれわれの生命そのもの！

あゝ、人の世に熱あれ、人間に光あれ！

人の世に熱あれ、人間に光あれ！

あゝ、水平社宣言讃歌！

(4) 【第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業を終えて】

3年B組担任 森口 健司

「みんなにとって水平社宣言讃歌の学習とは何であったか。」ただそれだけの問いかけであった。生徒一人一人はかつての自分、今の自分をこの宣言讃歌に寄せて語っていく。一人の思いに他の生徒の思いが重ねられていく。一人の生徒の願いが他の生徒の願いとなっていく。一人の生徒の勇気が他の生徒の勇気を生んでいく。まさしく共感と連帯の絆に結ばれた50分間であった。

同和教育の本質について語る生徒の姿、同和問題学習に取り組む教師の姿勢を聞いたです生徒の姿、そして、かつて自分が受けてきた同和問題学習が、自分をより惨めな人間と認識させていたと指摘し、同和問題学習のあるべき姿を語っていく対象地区生徒の姿。そんな生徒の姿を参会の先生方はどのように見つめていたのだろうか。何を感じどのように生徒の言葉を受け止めてくれたのだろうか。できるだけ多くの先生方より感想をいただきたい。

体育館での全体学習で磨かれてきた生徒にとって教室での授業ではスペースがなさ過ぎる。もっともっと多くの先生方に自分たちの心の叫びを聞いてほしかったと思う。授業はさまざまな角度からビデオに収められている。できるだけ多くの先生方にこの授業のビデオを見ていただきたい。そして生徒の思いをどう受け止められたかを聞かせてほしい。それがあの緊張間の中で必死に自分をさらけ出し、必死に自分の生き方を訴えた生徒を支えることであり、励ましていくことにつながっていくと思う。

多くの反響を期待しながら、県同研大会に寄せる生徒の思いがいつぱいつまった大会前日と当日の生活ノートを紹介する。

《僕らが燃やしてきた炎をつなげていくために》

大会前日 (H I)

今日の道徳の時間、発表ができませんでした。はつきり言って涙が出そうになった。それはあの家庭訪問でのお母さんの顔を思い出したから。はつきり言って、家ではM君と同じで僕も同和問題について話し合ったことはありません。たぶん妹は自分が部落の人間だということはわかっていないと思う。家に話を持ち込むのは何より妹のことが心配で話すことができません。妹の心は弱いから峠をまだ越えられないかもしれないという思いがあるからです。どうしたらいいかわからないし、お母さんも話をしようとはしないし……。

歌の練習のときも、涙が出そうになりました。特に「友よ」を歌っているときにグッとこみ上げてきました。明日も自分の気持ちを歌にぶつけていきたいと思います。そして、一人でも心を動かしてくれる人が出てくれたらと思います。

明日の県同研の授業、僕らが燃やしている炎がだれかにつながっていくように、僕らの思いというものをぶつけてみたいと思います。

《学校に帰ってからも同和教育頑張ってください》

大会当日 (H I)

今日の授業で悔しかったことがあります。涙のせいで発表ができませんでした。1回目の発表はもっともっと話すつもりだったのに思ったことを頭で考えるだけで涙がこぼれそうになってくるので2回しか発表ができませんでした。でも自分にとっての大きな峠を越えれたと思う。M君やTさんは僕よりも大きな峠に向かっているなあと思った。僕はまだ涙というものを背負ってい

る。お母さん似で、僕も泣き虫だけど、悲しみの涙は流したくないから強く生きたいと思う。

この水平社宣言や水平社宣言讃歌でえたものは、3年B組という固い団結の絆だと思う。一人一人の悲しみが怒りとなり語り、そして支え合っている。今日の授業の終わりに男の先生が僕のところにきて「頑張ったなあ」とか、「よかった」とかいうようなことを言ってくれた。僕はものすごくうれしかった。発表して本当によかったと思った。この先生だけでなくほとんどの先生たちも、この学習の大切さをわかってくれたと思う。この3年B組で、この3年生で、そして板野中学校で燃やしたこの炎を各先生たちが、まただれかにつないでくれたらと思う。

自分の思いを語っていくことによって自分という人間が変わったと思う。2年生に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。そして、朝がさわやかに感じて、そして人の優しさというものが見えてきたと思う。

一番今日うれしかったことはN君がきてくれたことです。授業中、雑音が横であったとき、N君は微笑んだ。ここに本当に人間性というものを見たと思う。今日帰るときコスモスの花が太陽に照らされていた。まるで僕に勇気をくれているような気がした。

過去を背負うのでなく今を頑張って、未来に希望を持ちながら頑張っていきたいと思う。今日は感動することが多かった。僕は悲しいことではめったに泣かないけれど、嬉しいことがあるとすぐに泣いてしまう。今日の歌のときもそうだった。涙を出さんと思っても、目に涙がたまってくる。前を見ると涙がこぼそうになった。周りの雰囲気そうさせたと思う。僕らの歌を目をつぶって聞いてくれる人や、耳を傾けている人、うなずいている人、こんな人たちならと思った。でも見ると、無関心な人も中にはいたように思う。こんなに一生懸命になっているのに眠たそうにしていた人がいた。はっきり言って腹が立った。こういう人たちにこれから訴え語りたいと思う。

これからも悲しさでなく嬉しさで、そして歎くことよりも怒る気持ちで、これからも峠を越えていきたいと思う。支え支えられてこれからも自分というものを見つめて、そして頑張っていこうと思う。

今日昼からの発表のために武道館へ行くとき、女の先生から声をかけられた。「感動しました」と言ってくれた。僕は「学校に帰ってからも同和教育頑張って下さい」と言った。後でもっといろいろな話をしたらよかったと思った。でも多くの人の心が動いてくれたのが嬉しい。こう言ってくれる人たちは学校に帰っても頑張ってくれると思う。僕も人任せにならないように頑張っていくつもりです。

果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたつぷり浴び、空気を思いっきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても、弱音をはかず、希望のゴールへと進む。

《訴えることにより道は開ける。そして、人間は必ず変わる。》 大会前日(KK)

明日はいよいよ県同研だ。プレッシャーはあるような気がするけれど心の中には熱い勇気のようなものがある。その勇気の源はみんなの存在だと思う。私は勇気を出して発言したら、必ずみんなが応えてくれる、みんながいるからどんな状況にあっても頑張ることができる。みんなの顔を思い出すだけで、私にはできなことはないんだという気持ちになっていく。みんなと共に堂々と胸を張って語り他の学校の先生方に強い感動を与えていきたい。そしてその先生方がそれぞれ

の学校でこの板野中学校でなされたような、徹底した同和問題学習に取り組むようになってくれればと思う。

「訴えることにより道は開ける。そして、人間は必ず変わる。」この先生の訴えを私たちは自分自身の行動を通して実感することができた。郡同研までの私たちの変容、郡同研からの私たちの変容、そして全道研という大きな峠を越えてからの私たちの歩み。みんなと歩んできたこの学習の意味をしみじみと考えながら、明日は思いきり私の思いをぶつけていく。

明日も生活ノートにいっぱい書きますから、先生いそがしいと思うけど読んでください。

《水平社宣言は私にとって大きな支え》

大会当日 (KK)

今日は県同研だった。知っている先生もたくさんきていた。緊張感は少しもなかった。昨日の夜も授業のことを考えていると言いたいことがいっぱい出てきた。今日の授業はもつと言いたいことがあった。やっぱり50分という時間は短過ぎた。

私はこの授業で成長していく自分に気づいた。3年B組というクラスと出会うまでは、手を挙げて発表するということができなかった。でもみんなと出会ってからは自然に挙手できるようになった。私自身こんなに友を信頼したのははじめてだ。自分の思いのすべてがぶつけられるというぐらい信頼できた仲間、私たちはすごい絆で結ばれているんだと思う。

今日の授業で、今までやってきた同和問題学習のすべてが水平社宣言にあてはまると思った。水平社宣言は私にとって大きな支えとなっている。3年B組の絆もこの水平社宣言により固いものになっていったと思う。

《中学校最後の公開授業》

大会当日 (SE)

中学校最後の公開授業にふさわしい授業だった。クラスの3分の2以上が発言したし、やっぱり3年B組でよかったと思った。そして「水平社宣言讃歌」についても最高の授業だった。B組だけでなく他のクラスの授業もすばらしかったと他のクラスの友だちから聞いた。本当によかったと思う。

今日の授業中、冷たい床に正座して一生懸命メモしている先生や、人垣の後ろからビデオカメラを持った手だけ上に挙げて撮影している先生がいた。授業が終わって涙を浮かべている先生もいた。そんな先生を見ていると、「私たちは何かを残せた」という気持ちになって嬉しくなった。

昼からの3年生全体の発表、「友よ」の曲を歌っているとなぜかジーンとなって曲が終わるのがとても早く感じられた。歌が終わった後で〇さんが私に「一番前に座っていた人が、何回もうなずきながら聞いてくれよったよ。私、感動してその人ばかりを見ていた」とニコニコしながら教えてくれた。こんな機会に出会えて本当によかった。私たちの授業や発表を見た先生方は、各学校に帰って授業や発表のことをみんなに伝えてくれると思う。そこからまたこの取り組みが広がっていくことを望みたい。今日は全道研以上というぐらい清々しく授業が終われた。でも絶対に50分は少な過ぎた。もつともつと言いたかった。

余談ですが、A組のH君は授業後参会の先生に握手を求められたそうです。私も阿波中の先生に「陸上しよるEさん」と聞かれました。その先生は後で知りましたが、今高校1年で去年県中学のトップにいた先輩のお父さんだそうです。ちょっとうれしかったです。

《胸を張って堂々と自分の意見が言える人間になりたい》

大会当日 (JK)

今日の授業は今までの授業の中で一番緊張した。郡同研のときは緊張より、不安の方が大きかってあまり緊張はしなかった。今日の授業は始まる前から体が震えてきてすごく緊張した。

郡同研のときに私や他の人が流した涙は悲しみの涙だったと思うけど、今日の井上君の涙は喜びの涙だった。私もこの学習をしてきてよかったと思う。自分自身が大きく成長したと思う。

昼からの発表で「友よ」を歌っているとき、郡同研のときのことを思い出していたら、3年B組のみんなと出会えたことが嬉しくて、もう少ししたらみんながバラバラになることがつらくて涙が出そうになった。

まだまだいろんな不安があると思うけど、みんなで頑張ったこの学習のことを思い出して、もし差別されても下を向かずに胸を張って堂々と自分の意見が言える人間になりたいと思う。今の自分ではまだまだなのでもっと勉強していきたい。

今まで家族とこの問題について一度も話し合ったことがないので、またお母さんやお父さんとも意見を出し合いたい。妹はまだ自分が部落出身ということをたぶん知らないと思う。妹のこのことを言った方がいいのか迷っている。

《自分のすべてをぶつけて頑張っていこう》

大会当日 (KH)

今日は一番多く発表した日でした。とにかく今日は最初からどんどん発表していこうと思っていました。郡同研のときに授業の後半、手を挙げ続けたにもかかわらず、みんながいっぱい手を挙げていたためあててもらえず時間がきて自分の言いたかったことが発表できなかったことが頭にあったからです。その郡同研の反省があったことによって、今日は自分なりに僕の腹の中にあることを思いきり発表できた授業となりました。

今日の授業の終わりのところで、N君とT君が手を挙げて発表したとき、郡同研や全道研の感動と今日の授業での感動が重なって、嬉しくなってきました。みんなでこの学習に取り組んでよかったなあとしみじみ思いました。発表してくれた内容もすばらしかったけど、その内容よりも多くの仲間が手を挙げて堂々と語っていくところに大きな意味があったと思います。

今日の授業が終わって帰ろうとしていた時、男の先生が「もう帰るん」と声をかけてくれました。僕は「12時30分に体育館で歌を歌いにきます」と応えました。その先生はにっこり笑って「頑張りよ」と言ってくれました。僕は何か知らないけれど無性に嬉しくなりました。たぶん僕たちの授業を見ていた人だと思うけど、一人でも多くの人がこの学習の大切さをしみじみとわかり、学習に自分のすべてをぶつけて頑張っていこうという気持ちになってくれれば、差別解消の大きな一歩を踏み出せると思いました。

《悲しみの涙は絶対に流さない》

大会当日 (TK)

今日の授業は、郡同研の時に比べて胸張って受けられたと思います。涙なんか流さなかったし、私もI君みたいにうれし涙が出そうでした。人間が変わるとは、こういうことを言うんじゃないかなあと思います。KさんやMさんやSさんやI君も、それから私ももう悲しみの涙は絶対に流さないと思います。

《一人がみんなのために、みんなが一人のために》

大会当日 (MI)

徳島県中学校同和教育研究大会が終わりました。本当にKさんが言ったようにアツという間の50分間でした。私は前の方の席なので、みんながパッと手を挙げるところが見られませんでした。でも聞いていたら一つのときれもなくどんどん意見をつなげることができました。やっぱりここで3年B組のつながりがどれだけ深いかということを知ることができました。

何人かの人が言っていたけど「人は周りの影響で変わってしまう。」と私も思いました。もし周りの人たちが部落の人たちに対して、他の人たちと違う目で見ているなら、やっぱりその人たちも部落に対していい感情はないと思います。でも、周りのみんなが「差別をなくそう！」と本気で心の奥から思っているのであれば、その人もみんなに負けず頑張っていくと思います。

実際、私は2年のとき発表するといったら、うつむいて資料の学習プリントを読んだの発表でした。それが今、堂々と前をしっかりと向き語ることができたのは、3年B組のみんなのおかげであり、先生のおかげでした。私に少しずつ勇気を与えてくれ支えてくれました。本当に3年B組のみんなに「ありがとう」が言いたいです。3年B組は前よりも今がますます信頼できるようになりました。部落に生まれた人、そうでない人、そんなのは関係なしにみんなこの学習にいつしよになって取り組む姿はきっとすばらしいと思います。「一人がみんなのために、みんなが一人のために」という言葉があるけど、まさしく3年B組にぴったりの言葉だと思います。今日の授業だつとときれがなく本当に次から次へと発表して、今までなかなか発表できなかった子もしっかり思いをぶつけてくれました。すごく成長したと思います。この授業、本当にやってきてよかったと思います。みんなのこのつながりが、これからも、高校に入っても、またこの先ずっと切れることないものになればと思います。今日の授業、本当によかったです。

昼から歌があつて歌い終えての感想は、すごくすっきりしてさわやかな感動にひたることができたということです。特に「友よ」の声がとても大きくてよかったと思います。歌い終えたとき、周りの人たちが拍手してくれてうれしかったです。前の「ナイン」のときよりは、沸き起こり方が少なかったかもしれないけど、やっぱり心からの拍手はうれしいです。

《同和問題に必死に取り組んでいく先生になりたい》

大会当日 (MM)

以前から、将来の夢の中に学校の先生になりたいというのがあった。今思うと今までは普通の先生にあこがれていたんだと思う。でも今は違う。先生になりたいという夢は同じようにあるが、同和問題に必死に取り組んでいく先生になりたい。この思いは3年生の先生方を見ていて思うようになった。僕は同和問題に必死に取り組む先生方や周りのみんなの姿を見て嬉しくてたまらない。もし同和問題の学習がなかったら、自分を語ることも、自分をさらけ出すことも、自分が部落に生まれたということを誇りに思うこともなかったと思う。僕はこの学習の中で自分の意見なども思いきり表現できるし、語れるようになった。僕が3年生の先生方に同和問題に関わる生き方をつかませてもらったように、いつか学校の先生となって人間として同和問題に関わってどのように生きていくかを生徒たちに語っていくことができるようになったらなあと思う。その日を目指してこれからの一日一日を誠実に精一杯に生きていきたい。

(5) 【第21回徳島県中学校同和教育研究大会への思い】

板野中学校3年B組担任 森口 健司

10月31日(木) 徳島市富田中学校で行われた第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業を終えて、わずか3週間たらずの11月19日(火)で第21回徳島県中学校同和教育研究大会を迎える。わずかな期間であったが、生徒たちは今までに築き上げた同和問題学習の成果を土台として、しっかりと「水平社宣言讃歌」を読み込んでいく。私がかつてこの「水平社宣言讃歌」を著わした西口敏夫先生の「よろこび」という詩に自分の生き方を見出したように、生徒たちの中にも、中学校の同和問題学習の総決算として、「水平社宣言讃歌」の一節一節が染み込んでいく。

そんなとき、私のところへ次のような話が入ってくる。富田中学校での特別公開授業、道徳教育の研究大会にもかかわらず話は、同和問題学習と道徳教育の接点を求める生徒の発言が繰り返される中で、生徒が主体的にしっかりと自分を語っていく姿に驚いた先生が、隣で授業を見ていた先生に「どうしてこんな授業ができるんだろうか。」と話し掛けたとき、その隣にいた先生が、「あの人は違うからこんな授業ができる。」と囁いている。その囁きを耳にした先生は、違うというのは、部落をさしているなど敏感に感じたという。特別公開授業の最も盛り上がってきた場面で、そんな囁きが参会の教師の中にあつたという。そんな話が、全国大会を終えて1週間ほどしてから、私の耳に入ってくる。

富田中学校での第25回全日本中学校道徳教育研究大会、これはまさしく道徳教育の研究大会であつたが、生徒は、これは道徳教育、それは同和教育とわけて考えることはない。「道徳教育も、同和教育も、人間としての生き方を学んでいくんだから、全く同じとはいかなくても、共通する部分がいっぱいあるのでは……」と生徒の思いが、語られていく。その生徒の思いに触れて、私は、「参会の先生方に人間としての生き方について生徒の熱い思いを伝えることができた」という私なりの喜びのあつた授業であつた。

授業が終わったときに参会の先生方からいただいた拍手。また生徒が退場するとき、退場する生徒が全く見えなくなるまで続いた拍手。私は感動で胸がいっぱいになっていた。あの状況の中で、「あの人は違うからこんな授業ができる。」という思いでおいでる先生が存在することが、無性に悲しかった。しかし、私の心の中はその悲しみよりも、こんな思いを持った教師たちに、どうして同和問題を解決させる学習をできるかという思いと、このような教師たちの意識の中に、同和問題解決への取り組みは、部落に生まれたものだけが必死に頑張ればよいというものがあり、同和問題は部落に生まれた人たちの問題という認識しかないと思った。

私はこの現状をどんなことがあつても、打ち破っていきたくし、すべての教師が、自分の生き方や生きざまをぶつけていくような同和教育が、実践されていくように訴えていきたいと思つた。幸い私には11月19日の第21回徳島県中学校同和教育研究大会での公開授業が与えられている。第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業での憤りは、第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業への熱い思いと変わっていった。

今も同和教育を推進していくはずの教師たちの職場においても、部落差別の厳しい現状を実感することが少なくはない。特に結婚差別の厳しさはいつも思うことだ。結婚を約束し、熱い思い

で結ばれようとした若い教員同志が、相手が部落出身の教師とわかったとたんに、愛がさめていく。愛を貫くことができない。そんな話は何度となく耳にしてくる。今年度、高知で開かれた研修会での報告にもあった。相手の男性から、「君の家は同和とは関係ないだろうね。」と言われ、教師になって始めて自分が部落出身であることを知った女教師が、差別に負けて自らの生命を絶とうとした報告。差別は人間を無気力にし、絶望させていくんだと今さらながらに実感する。

先日もかつて同じ職場で共に同和教育に取り組んだ部落出身の教師から、先輩教師が見合いを進めてくれる。何度も何度も進めてくれる中で、「自分は同和地区に人間です。それでもいいんです。喜んでさせてもらいます。」と彼は自分のことを打ち明けている。とたんにその見合い話は消えていく。同じ職場で勤務し、この人はすばらしいと思った。親類や知り合いの結婚相手にとと思う。それが部落出身ということがわかったとたんに、その話は消えていく。これが大半の部落出身教師のおかれている状況でないだろうか。

そんな差別の現実をしつかりと見据え、同和問題はすべての教師自身の生き方にかかわる問題として、同和問題にかかわる教師一人一人の生き方や生きざまが、生徒一人一人にぶつけられ、語られていく同和教育を推進しない限り、部落差別を解消していく同和教育学習にはなっていないと思う。

私は部落差別に怯え、部落差別の現実苦しむ生徒の姿を見たとき、私は私自身の部落差別の中を生きてきた生きざまや生き方をぶつけることなしに、生徒の生きる力や生きる展望を持たせていく同和教育を実践することはできないと思い、私は私自身の生き方をぶつける同和教育を日々実践してきた。その中で、生徒の本当の思いが授業の中で語られていくようになった。もし私が部落差別の中を喘ぎながら生きてきた事実や、部落差別の中を生きてきた思いを隠し、教師という立場だけで、生徒たちに「差別はいけない」ということをただ訴えるだけで授業をしていたならば、富田中学校での授業の展開は生まれてこなかったと思う。

私は私自身の生きざまをさらけ出し、生徒一人一人の思いを必死に聞こうとした。その中で対象地区に生まれ生徒が胸を張って語り出し、対象地区に生まれなかった生徒もその悲しみや苦しみを共に担ぎ、対象地区の仲間を必死に支えようとした。部落問題についての生徒の本当の思いを聞こうとするとき、まず教師が部落差別の中をどのように生きてきたか。どのように部落問題を考えてきたか。その教師一人一人の中にある差別心はどこからきているのか。またかつてあった部落を否定し、部落を差別する心をどのように克服したのか。部落差別の中を生きてきた本当の生きざまを生徒自身に語っていくことができたならば、生徒の中にもこの先生ならばという気持ちが生まれていくと思う。

私は多くの先生方にこのことをわかってほしいと思う。生徒たちはいつも見ている。この人は本物か。この人は裏切らないだろうか。この人を信頼して大丈夫だろうか。その責任とやりがいを多くの先生方と共にしっかりと担ぎ続けたい。一人の対象地区生徒の思いを紹介する。

《中学2年の時から今までの全体学習で、自分が変わっていったのが、目に見えるように自分でもわかります。完全に変わったというまでは行かないかもしれないけど、自分を隠し続けることの恥ずかしさを知りました。中学2年の時の最初の全体学習の時は、他のクラスの授業を見てい

るだけでも、何か逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。本当に本当に部落出身という自分が嫌でした。友だちにも隠そうと思っていたけど、森口先生の熱心さに引き付けられていったと思います。今、初めてずっとずっと思っていたことを書くんだけど、私が今まで担任を持ってくれた先生は、口先だけで「差別はいけない」と言っているのだと思っていました。でも、森口先生はただ口先で言っているのではなく、本当に心から言っているのがわかりました。みんなも私と同じように思っているだろうと思います。だから学年全体での同和問題学習が、だんだん真剣に取り組めるようになってきたんだと思います。》

これは、2年生での学年全体が体育館で行った同和問題学習（全体学習）で涙を流した生徒が、3年生になって記した文章である。その中に記された言葉、「森口先生はただ口先で言っているのではなく、本当に心から言っているのがわかりました。」私はこの言葉を胸に刻んで頑張りたいと思し、このことが常にすべての教師に問われていると思う。そのことを多くの先生方と確認し合いたい。そして、対象地区の生徒は、部落出身でない先生方に、綺麗事ではなく部落差別の中を生きてきた教師自身の醜さをさらけ出し、差別という衣服を脱ぎ捨て、自分たちと同じ裸になって生きていくことを心から期待している。そのことを先生方一人一人にわかっていたいただきたいと思う。

私はすべての教師が同和教育に自分の生き方、生きざまをぶつけて同和問題学習に取り組んでいき、先生方一人一人が同和問題学習のあり方を実感していく。そんな11月19日、第21回徳島県中学校同和教育研究会公開授業にしたいし、「水平社宣言讃歌」の学習にしたいと思った。

私は生徒一人一人に富田中学校での第25回全日本中学校道徳教育研究会特別公開授業の最も私たちが熱くなった場面で、「あの人は違うからこんな授業ができる。」という授業を見ていた先生の囁きがあったことを語った。そして、私は今一步、同和教育に自分をぶつけることができないう先生方に、同和教育のあり方や同和教育に取り組むことが、どんなにすばらしい生き方であるかをわからせていく授業がしたいという思いを生徒に語る。その私の思いと「水平社宣言讃歌」の学習に寄せて、記された翌日の生活ノートの中に次のような文章がある。

《水平社宣言讃歌は水平社宣言を詳しく説明してくれているので、宣言文の一つ一つの言葉の意味が、はっきりつかめてくるような感じだ。私は水平社宣言讃歌に出会えたことによって、水平社宣言がものすごく好きになってきた。心の底から勇気のようなものがわいてくる。「太陽は、夜が明けたので、昇ってくるのではない。れい明にみちびかれて、太陽は現われるのではない。太陽が昇るから夜が明けるのだ。太陽が近づくかられい明があるのだ。私たちがその太陽になろう。」私たちがほんまに解放の主体者にならなければいけないとしみじみ思う。

今日先生の話聞いてものすごく腹が立ったところがある。全国大会の授業のとき、周りで見ている先生の中に、「先生が部落に人間だからあんな授業ができる。」というような囁きがあったと聞いて、ものすごく腹が立った。そんな意識でいるから同和問題はなかなか解決しないんだと思う。私たちはそんな先生たちに、私たちのすべてをぶつけて取り組んできた同和問題学習の大切さをわからせたいと思う。3年B組には絶対できると思う。みんなには差別のことを何も知らない。自分には関係ないと思っている人たちに納得させ、説明できる力がある。この取り組み

は完全なものに近づいていると思う。中二の時から積み上げてきたこの学習を通して、私たちはそれぞれに成長した。この板野中学校3年生の熱い思い。私たちは常に同和問題学習の主体者になれる。そして、私たちは部落解放への主体者になる。私もその一員であり続ける。これが今日感じたことそのものです。》

これは4月の家庭訪問で初めて自分の対場を自覚し、悲しみの涙を流し続けた生徒の文章である。「私たちは常に同和問題学習の主体者になれる。そして、私たちは部落解放の主体者になる。私もその一員であり続ける。」と綴る姿に、この生徒たちとならどんな困難な状況にあっても、頑張り続けることができると思った。

今まで取り組んできた同和問題学習の中でつかんできた思い。また、同和問題学習を通して培ってきた考えを多くの先生方にわたってもらおうんだ。そんな思いの込み上げてくる状況で、生徒たちは11月19日、第21回徳島県中学校同和教育研究大会の日を迎える。

教室に溢れ出るほどの先生方が見つめる中で始まった公開授業は、生徒一人一人の「水平社直言讃歌」に寄せる思いが綿々と語られていく。一人の思いに、また一人の思いが重ねられていく。そんな中でS子が富田中学校でのある教師の囁きについて、自らの思いをぶつけてきた。

《全道研の終わったときに先生が、「先生が部落の人だからあんなに頑張れてあんな授業ができるというような囁きをした先生がいた。」と先生の友だちから聞いたと言っていましたけど、私たちの中には部落に生まれなかった子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんなでこの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかった子は部落問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくやさしかったです。》

そのS子の発言で、授業は火に油が注がれたように生徒一人一人の部落差別解消への炎は燃え上がる。K子がつなげる。

《私もS子さんと同じで先生から、先生が部落出身の教師だからそんなに一生懸命なんじやと聞いたとき、すごく頭にきて生徒に本当の生き方を教えないかん先生が、どうしてそんな言葉が言えるんかなと思いました。》

続いてY子が、怒りをぶつけるように語る。

《私も先生からの話を聞いたとき、すごくくやしかったです。私たちはそんな部落に生まれたとか生まれなかったとか関係なしに、この差別自体がおかしいことだし、このことは人間としてなおしていかなあかんことなのだと思います。はっきり言って私はこの学習は、部落の人のためではなくて自分自身のために、この問題の学習に取り組んでいるつもりです。》

そして、M夫がその教師の姿を分析するかのようになり、しみじみと自らの思いを語っていく。《その先生はたぶん、この学習の本当の重要性を受け止めることが、できていないんだと僕は思います。そして、人の生命に関わるという差別の厳しい現実を知っていたら、そんな情けない言葉は絶対出てこないと思います。この問題は部落に生まれたとか生まれなかったということ抜きで、すべての人が自分自身の問題として考え解消に向けて取り組んでいかなければ、絶対解決していかない問題だと思います。人間は大人になると人間としてすばらしくなっていかなければな

らないのに、自分の差別心は棚において人のことはとやかく言うけど、自分は差別の固まりという先生もいるんだなあと思うけど、僕たちはそんな大人や先生の差別心とかに気づいてしっかりと訴えていかなければ、部落差別を始めとする差別は、その人の心からは消えないと思います。また、僕の中にも差別心があつてこの学習をしっかりと続けていけない限り、その差別心は年をますごとに段々と大きくなっていくし、根強く残っていくと思うんです。だから、僕自身この学習を大切に続けていきたいと思います。それと部落差別を残してきた大きな原因として僕は、部落問題に無関心な人と、この学習を正しく学習してこなかったおじいさんやおばあさんなど、この教育を受けることがなかった人たちの二つに大きな原因があると思うんです。その中である意味で一番こわいのが無関心な人だと僕は思うんです。部落差別をなくすために生きる人生は、ものすごい喜びがあるけれど苦労も多いと思います。無関心な人は真剣に考えることが少ないということだから、無関心な人のほとんどが、差別とたたかう側と差別する側に分けたら、差別する側に流されてしまうと思うんです。僕は部落差別に無関心な人を絶対につくつてはいけないと思うんです。すべての人が部落問題を自分自身の生き方に関わり、人の生命に関わる大変な問題なんだと自覚していかなければならないと思います。僕はこの学習は、人間としての本当の生き方をつかんでいく学習だと思うんです。僕はこの学習から自分に自信がもてるようになって、人前でしゃべるのも緊張感がなくなって、いつも思いきり自分の思いをぶつけていくことができるようになってきたと思います。絶対に負けないというものをつかむことができたと思います。》

M夫の語りをかみしめるように聞いていたN子は、富田中学校での感動的な場面を思い返しなが、自らの思いをぶつける。

《私たちがあれだけ一生懸命頑張って発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて、胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおつたと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと同和問題について学んでなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というのもあるけど、将来同和問題学習に対する本当のことを知らないで、ずっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思いました。》

続いてK子が、同和教育に取り組む教師の姿勢について発言を重ねる。

《昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に「一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは、教育はできない」というのがあつて、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかったら、同和教育はやっていけないんだと思いました。》

Y子は、参観の先生方に部落差別の矛盾を訴えるかのように語っていく。

《この前の授業のときも言ったけど、同和問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に出会えてこういう授業をみんなで一緒にやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、

その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままでは何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態にいるんじゃないかと思うんです。だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目でも黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしなだけ。でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないように思うんです。先生から「ほんまに部落に生まれたと思うていてもその証拠がどこにも見つからなんだ」という話や、「自分が部落でないと思うていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかった」という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうか決定的な確証もなしに、人が勝手に「あの人が部落で、あの人が部落でない」と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。》

これらの発言は、参観の先生方に「先生方の生き方や生きざまをぶつけるような同和教育をしてください。」と訴えているように思えた。私は、この3年B組の生徒たちと共に、すべての中学校における同和教育の取り組みを、より確かなものとしていくために闘っているんだという思いで、生徒たちの発言を身体全体で受け止めていった。

第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業は、同和教育に取り組む教師の姿勢を問う闘いであつた。授業の最後にY子が語った。

《もう時間がきてしまって、言いたいのになかなか言えなかった人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だったことを誇りにして、これからはずっと頑張ってほしいと思います。そして、部落に生まれた人は、これは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かっていかなければいけないと思います。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に向かっていきたいと思います。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには、絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんです。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張った姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずずっと差別解消の日まで頑張ってほしいと思います。》

この発言で第21回徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業は終わった。この生徒たちの熱い思いを受けて、大会後多くの先生方から、さまざまな反応があつた。その中でこの授業の内容を学級の生徒に伝える学級通信をつくれ、その学級通信を送ってくれた先生もおいでた。授業での生徒の発言に応じて、同和教育に必死に頑張ろうという先生方の存在は、私の大きな支えである。学級通信と共に送っていただいた手紙は、次のように思いが記されていた。

《はじめまして、昨日はすばらしい授業、熱い思いで見させていただきました。

生徒のみなさんの前向きな取り組み、そしてそれをすべて受け入れるように、真剣な先生の姿勢に心うたれ、どうしても手紙を書こうと思いました。“先生”と呼ばれるようになって、今年

で5年目になります。同和問題学習にも取り組んできたつもりですが、やはりまだ迷いというか、弱い部分があります。その弱さを隠して、今までは生徒の前に立っていましたが、そうではない。まずありのままの自分をさらけ出して、そして前進することが大切なんだ。そんなことを3年B組の生徒のみなさんや森口先生、また、他のクラスの生徒、先生方から学んだように思います。

さっそく今日、私のクラスの学級通信に授業のほん一部を紹介させてもらいました。勝手にすみません。でもあの炎をどうしても私のクラスの仲間にも、伝えたかったからです。十分に伝えきれない点があるかもしれませんがお許してください。それはこれからの取り組みの中で考え合っていきたいと思います。

言葉たりませんが、ほんとうにすばらしい感動ありがとうございました。これから寒くなりますが、みなさまますます前進してってください。》

またある先生は、同和教育に取り組む思いと、3年B組の授業とを重ねて熱き思いを手紙に綴ってくれた。

《3年B組の授業は、私の心に優しさを残してくれました。そして、同和教育ってすばらしい。一生頑張っていこうという思いを確かなものにしてくれました。

私が部落差別と心底闘っていこうと決意したのは、新任教師として赴任したM中学校で部落出身のY子と出会った時です。Y子があゆみに「先生、私ほんまに好きな人と幸福な結婚できるん」と書いてきた時、私は「なんで13歳のY子が、こんな思いをせないかんのじゃ、こんな愛しいY子が部落に生まれたというだけで、こんなに悩まないかんのじゃ」と私の心は張り裂けそうになりました。この時、私はこの憎むべき部落差別と闘っていくんだと心に決めました。

それから7年、私は同和問題と目の前の子どもたちのために、そして自分のために一生懸命取り組んできましたが、ともすれば自分に甘くなりがちだった私に森口先生、そして3年B組のみなさんとの出会いは、私の心に熱い炎を燃やしてくれました。やらなければ教師ではない。いや人間ではない。この3年B組のみんなにつながりたい。

私も、2年2組の40人の生徒たちも、板野中学校の3年B組のみなさんとたとえ遠くはなれていても、共に人間としての生き方を求める、部落差別をなくしていく人間として、仲間としてつながっていたい。

11月19日、3年B組のみんなが私に教えてくれたことをいつも心に刻んで、これからも頑張っていきます。森口先生、これからも一緒に頑張りましょう。よろしくお願ひします。》

3年B組の授業を見られた先生方のこのような思いは、私にとっても、3年B組の生徒たちにとっても、大きな支えとなり、大いなる励ましの声となっていた。同和教育の営みとは、互いの存在を認め合い、尊敬し合い、そして生きる喜びを共につかんでいく営みだとしみじみ思う。